

色も色いろ 第63話 蘇る曜変



曜変の再現に挑む長江惣吉さんの作品

独自に光彩を追求した曜々盞（ようようさん）



2016年12月20日放送のテレビ東京系「開運！なんでも鑑定団」で、世界に3点しか現存しないとされる「曜変天目茶碗」が新たに見つかったと放送したことについて、視聴者や専門家から「ニセモノの可能性もある」という指摘が出ている。

異議を唱えた一人、瀬戸市在住の長江惣吉さんの「曜変・長江惣吉展」が今（7/30まで）瀬戸市美術館で行われている。真偽論争はさておき、曜変茶碗の魅力に惹かれて、早速出かけた。虫の知らせか、数日後に再訪問すると、ちょうどマスコミの取材中で、曜変再現に至る経緯や具体的な手法まで、詳細に伺うことができた。

今から十数年前に色材協会のセミナーを聴講した折には曜変天目の青い曇雲状の耀きは、原料に含まれる鉛に起因すると解析し、鉛は食品衛生上使えないため、銀を使って再現に成功したとする報告がなされていた。「秀吉が晩年、少し頭がおかしかったのは、この茶器の鉛のせいだったかもしれない」との尾ひれがつき、鮮明に記憶している。「重金属を高温加熱し、薄膜を表面に生じさせると干渉により、発色する。ただし、表面が空気に曝された状態で経年すれば、酸化して耀きを失う。数百年を経た曜変天目茶碗はその輝きを全く失っていないことからすれば、重金属説はあり得ない」と長江さんの説明は明解だ。近年中国南宋の宮殿跡から曜変天目茶碗のかけらが見つかり、蛍光X線解析の結果から重金属の存在が否定された。

長江さんは、曜変の製法は先代が取り組んだ「酸性ガス法」と結論付け、福建省建窯を28回も訪れ、原料を採掘輸入すると同時に、窯跡から大量の蛍石（フッライト）が出てきたことに着目した。フッ素系酸性ガスにより、陶器表面に細かい凹凸が生じ、その構造色が耀きを作り出すとの結論を導き出した。（そういえば、珪酸ガラスの表面を荒らすのにフッ化水素を使うことを思い出す。）フッ化水素は毒性が強く、そのため、窯を続けることが難しかったのかもしれない。

とあれ、現代によみがえった曜変の妖しい耀きに惹き込まれる。